

官能戦争人肉食小説  
「イエロームーン 前編」



作者 大黒達也

『イエロームーン 前編』

作者 大黒達也

一． あらすじ

二十一世紀初頭、度重なる異常気象やウイルスによって、地球規模の食料危機が発生し、それを契機としてアジアの大国C国が中性子爆弾によって日本を侵略する。C国軍による占領下において、日本中の若く美しい女性達が、ある目的のために強制連行され、閉鎖中の食肉工場や医療施設に移送される。

二． 登場人物

楊大佐（ヨウ タイサ）

C国の日本占領軍の参謀。事実上の支配者である。絶

世の美女であるとともに残虐な性格の持ち主

### 呉大尉（ゴ タイイ）

楊大佐の忠実な部下。母国C国では、召使いとして楊家に仕える忠実な下部であった。

### 王大将（ワン タイシヨウ）

C国の日本占領軍の総司令官。比較的温厚な性格の持

ち主

## 三・目次

第一章 日本国消滅

第二章 悪魔の試食会

第三章 人肉市場

第四章 楊大佐

第五章 洋上の悪魔

第六章 永遠の悪夢

## 『本編』

### 第一章 日本国消滅

そこは、十年ほど前までは、この国で最も豊かな穀倉地帯だった。

大河によって作られた肥沃な大地は、米や麦等の農作物によって隅々まで覆われていた。

そこから続く山間地には、広大な丘陵地を利用して牧草地が作られ、無数ともいえる牛馬が放たれていた。

しかし、現在では、長期的な寒波等の異常気象によって、穀倉地帯には一本の米や麦も育たず、丘陵地帯にも一頭の家畜も見られなくなった。

どんよりとした曇り空の下、ひとりの年老いた農夫が、鋤で乾ききった地面を耕していた。

農夫の表情は暗く、眉間に刻まれた深い皺が焦りの氣持ちを顯していた。

一方、都市部においても、スラム化が急激に進行し無数の失業者が路上に溢れていた。

人々の心は荒廃し、強盜、強姦、殺人が日常的に行われた。

果ては、陵辱の上、殺害した女達の肉を、家畜の肉と称して売りさばく者さえあらわれた。

スラム街の奥深く、一般人が決して足を踏み入れることの無い地区では、人肉の売り買いが公然と行われていた。

店の軒先には、内臓を抜かれた若い女の首無し死体がぶら下がっていた。豚や牛等と何らかわることが無かつ

た。

若い女の肉は金と同じ値段で取り引きされた。

二十一世紀初頭。人類は異常気象による食料不足や原因不明の疫病によって存亡の危機に瀕していた。

さらにC国本土が発祥地といわれる家畜病が全世界に蔓延し、ほとんどすべての食肉生産基地は壊滅状態となっていた。

人類史上最大といわれる異常気象によって小麦や米等の穀物生産も決定的なダメージを受けていた。

それらが引き金となり、世界中の民族問題が深刻化し、内乱や局地的な戦争が頻発していた。世界のエネルギー基地である中東諸国にも宗教戦争が勃発し、石油供給がストップしてしまう最悪の事態となった。

そこで世界の警察を自負するアメリカ合衆国は、中東  
和平の名目で在日アメリカ軍の八十%にあたる兵力の派  
遣を決定した。横須賀港からは連日のように、中東に向  
け戦艦や輸送艦が出港していった。

そんなおりに、対外的には民主化を強力に推進してい  
たC国政府が、突然日本に戦線を布告し、中性子爆弾を  
搭載したIRBM（中距離弾道弾ミサイル）の東風二十  
一号を日本各地にあるアメリカ軍施設や自衛隊駐屯地に  
向けて発射した。

アメリカ国防総省は、核弾頭ミサイルの発射を感知し  
たが、時すでに遅く、C国軍による核攻撃は成功し、日  
本は九十%以上の戦力を失った。

ただし、核ミサイルの命中精度は非常に高く、なおか

つ使用した核が中性子爆弾ということもあって、火災等の二次災害による被害は小さく、民間人の死傷者数は全人口の1%、約百万人程度だった。

時を同じくして日本海で演習中のC国艦隊が、東京湾に向かった。翌日、東京湾はC国艦隊によって制圧された。

ここに、日本国は二千年と言われる歴史に幕を閉じる事となった。

C国軍が日本占領後、最初に行なった政策は、長期間閉鎖されていた食肉加工工場の復帰と数箇所国立病院の占有化だった。

食肉工場は牛や豚のトサツと解体、保存場所に別れていた。それらにはC国人技術者が派遣され、さらに復帰

作業の労働者として日本人が無作為に召集された。

病院施設には、C国や日本の高名な遺伝子工学の研究者や産婦人科医等が集められた。施設の復旧及び環境整備が急ピッチで進められた。準備が整った施設には、大勢の日本人男女が集められた。施設の門をくぐった者で生還した者はひとりもいなかった。施設の存在自体、日本人に知らされることは無かった。

続いて行われたことは、二十代の日本人女性に関する召集だった。C国軍は、テレビを通じ該当する女性達に、各地域の公共施設に集合するように呼びかけた。呼びかけに応じない場合は、処刑するとの厳しい通知内容だった。

召集場所のひとつである代々木にある\*\*小学校校舎

の体育館には、当日大勢の女達が集まった。皆、表情は硬く、無言で佇んでいた。C国軍担当官数名が、簡単な調査であることを説明した。女達は担当官によりいくつかのグループに分けられた。グループのひとつを残して、開放された。ただし、開放された女達は皆、所定の用紙に現住所等連絡先を記入させられた。

残された女達は、皆美しい容貌姿態を持っていた。担当官が全員にその場で裸になるように命令した。場内にごよめきが溢れた。誰ひとりとして動こうとしなかった。担当官のひとりが腰のホルスターからトカレフを抜き、近くにいた女の胸に狙いをつけ引き金を引いた。乾いた銃声が響き、女はその場に倒れ伏した。女の倒れた床には鮮血が広がっていった。

「キヤー！」

場内は迷惑う女達の悲鳴で騒然となった。出口は武装した担当官に固められ場外に逃げ出すことは不可能となっていた。逃走が不可能と悟ったのか全員がその場に座り込み、ある者は泣き崩れ、ある者は家族の名を叫んでいた。

「伍長、死体を宿舎の調理長のところに持って行け」

射殺された女の遺体は、担当官のひとりによって衣服をすべて剥ぎ取られ、全裸のまま黒いビニール袋に入れられ屋外に運ばれた。担当官の一人が天井に向けトカレフを発射した。場内は水を打ったように静かになった。

「早く、脱ぐんだ。命令に従わない者は射殺する」

女達は我先に衣服を脱いだ。場内には数十人の全裸と

なった美しい女達が呆然と立ち尽くしていた。

「準備ができた者は、ステージに上がるように」

先ほどまでは幕が閉じられていたのだが、いつの間にか開かれていた。そこには体重計、身長計、体脂肪計さらには医療用のベッド等が所狭と置かれていた。女達はステージにひとりずつ上げられ、女の担当官に体重や身長、バストやヒップのサイズまで計測された。

最後には医療用ベッドに寝かされ、皮膚の状態、例えば傷の有無やホクロの数までカウントされた。極めつけは太股を開かれ、性器、アヌスの色や痔疾等の有無が調べられた。大抵の女はこの時、羞恥心のため、声を上げて泣いた。

さらに皆の前で強制的に浣腸をされ便を採取される



者もいた。

黒木百合は、二十歳になる女子大生で、占領後は都内にある実家に隠棲していたが、両親や妹の安全を考えて召集に応じることにした。召集に応じない場合は家族にまで影響が及ぶとの通達内容であった。容姿はモデルといっても通用するような美人でスタイルも抜群だった。長身で手足が長く、乳房や尻も豊かに盛り上がっていた。「ほら、もっと尻を上げるんだ」

女担当官は、片手で尻をさすりながら、もう一方の手を腹の下に入れ、尻を上を持ち上げた。百合は診察台上で、四つん這いの格好をとらされていた。

女担当官は両手で尻の割れ目を広げ、サーモンピンクのアヌス周辺を舐め回した。身体検査の順番を待つ女達の視線が集まっていた。百合の口からさめざめとしたす

すり泣きが洩れた。十分に湿り気を持たせたアヌスに――差し指を挿入し中をかき回した。

「痛い。止めて下さい」

百合は背筋を反らせ、号泣した。

「ちょっと、五分ほど休憩してくるから、後を頼む」

その女担当官は、もうひとりの若い女の担当官に命令し、泣き叫ぶ百合の髪を鷲掴みにし、引きずるようにしてステージ横の倉庫に消えた。倉庫から百合の号泣が洩れていたが、それがすすり泣きにかわりやがては喘ぎ声にかわった。やがて、倉庫のドアが開き、担当官がひとり出てきた。そして女達の監視をしている兵隊のひとりを呼んだ。

「倉庫で寝ている女を反逆罪の容疑で緊急逮捕した。尋

問するから私の宿舎に送り届ける」

「はい。中尉殿」

兵隊は敬礼し、倉庫に入り、ぐったりとした百合を肩に担ぎ出てきた。そのまま屋外に消えた。女担当官の視線は、立ち去る兵隊に担がれた百合の豊かな尻に注がれていた。淫らな笑みが広がっていった。

検査が済んだ者は、革製のベルトを首に巻かれた。それは赤かピンク二色のどちらかであり、番号が書かれてあった。

最終的にピンクが十一名、赤が三十三名となった。十人が革ひもを付けられなかった。検査中に女達の衣類は、仕舞われ全裸のまま、グループごとに体育館に横付けに

駐車していたトラックに乗せられた。女達を乗せたトラックはそれぞれの目的地に向かった。ベルトを付けられなかったグループは、食肉工場や医療施設さらにはC国軍駐屯地へと向かった。

工藤紗也香は、ベルト無しのグループのひとりだった。身長百七十センチ、グラマラスな姿勢を持った肉感的な美人だ。年齢は二十二歳でC国による侵略前は渋谷に本社ビルをかまえる商社に勤務するOLだった。トラックの荷台に設けられた木製の長椅子の最後部に座らされていた。これから何処へ行くのか。自分たちがどうなるのか一切知らされていなかった。紗也香はなぜ自分がこのグループに加えられたのか疑問だった。

周りを見廻してみると、どの女も、美しい容貌姿態を  
持っていた。ただし、乳房が少し小さ目であるとか、腹  
部に手術痕があるといった多少の問題は皆、持っている  
ように感じられた。紗也香自身も、腹部に盲腸の手術痕  
があった。それ以外は、傷やホクロ等も殆ど無く、体毛  
も薄いすべすべの美しい柔肌を持っていた。隣の女も紗  
也香に劣らず美しい容貌を持っていた。少し痩せすぎの  
感じを受けた。乳房や尻の膨らみは豊かだった。その女  
と目があった。

「名前は？」

「美香。貴女は？」

「紗也香よ。よろしくね」

「私達。どうなっちゃうのかな」

「分からないわ。ただ……」

トラックは急に減速し、そして少し走行した後停止した。後部の幌が開けられ、自動小銃AK七四で武装したC国軍の兵士が二名現れた。無言のまま、紗也香と美香の腕を取って引き摺り下ろした。トラックは二人を降ろしてすぐに次の目的地へと向かった。

二人が降ろされたのは埼玉にある食肉加工工場だった。二人は兵士に引きずられる様にして工場内に連れ込まれた。兵士達は歩きながら女の尻や乳房をしきりに触った。最初の部屋で二人は、幅一メートル、長さ十メートルの細長いプールに入れられた。水深は一・三メートルほどで何か薬品のような匂いがした。兵士達に端から端まで歩くように手振りで指示された。プールからを出

た時、股間や脇の下にむず痒さを感じた。手で股間を触ってみると陰毛が簡単に抜け落ちた。脇毛も同様だった。どうやらプールの水には強力な脱毛剤が入っているようだった。次にシャワー室のような場所に連れ込まれた。そこには帽子をかぶり白い服を着た係員が二人待っていた。兵士達は係員に二人を預け出ていった。二人はタイル張りの部屋の中央に立たされ、強力なシャワーで全身を洗浄された。男達は、笑いながら股間や乳房に向け、シャワーを浴びせ掛けた。洗浄が終わり二人は別の部屋に連れて行かれた。そこは二十帖ほどの広さで中央にギロチン台によく似た装置が置かれていた。ギロチン台の隣にはベルトコンベアがあり、壁に開けられた穴をぬけ、隣の部屋へと続いていた。係員が紗也香の腕を掴ん

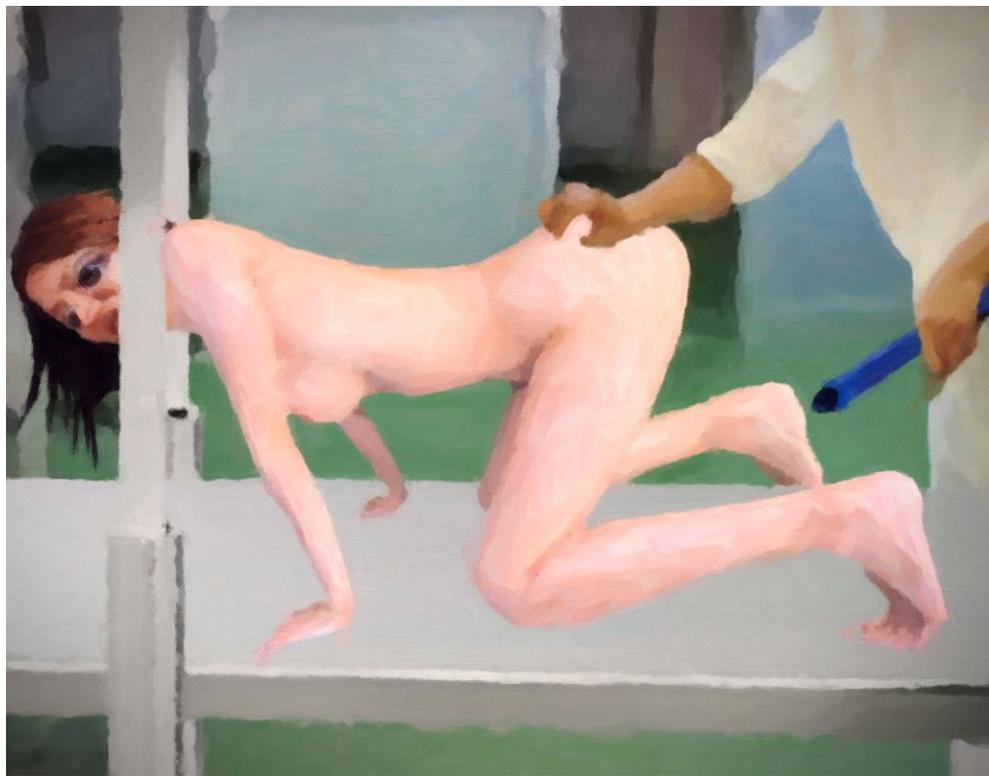
だ。

紗也香はギロチン台に接した金属製の台に四つん這いの格好で載せられ、四肢を皮ひもで台に固定された。

22

先端を、泣き叫ぶ紗也香のアヌスに強引に差し込み、ホ

そして首を断頭用の枠に固定された。係員がホースの



ースについた電源スイッチを押した。「キューーン」というモーター音の後に「ゴボゴボ」という排便を吸い出す音がした。腸内の便を吸い出した後にアヌスの汚れをシャワーで洗浄した。四つん這いになっているので、大きな真っ白い尻やその合間の亀裂が丸見えになっていた。係員の男がマスクを外し、尻の合間に顔を入れた。若く美しい女の膺やアヌスは、素晴らしい味がした。十分に舌で舐った後、台の上に跨り、男根を一気に挿入した。重たい乳房を片手でこねくり回しながら腰を激しく動かした。もう一方の手にはギロチンのスイッチが握られているた。

紗也香の大きな瞳からは、涙が止めどもなくあふれ出していた。嗚咽がおさまらなかった。男は射精の寸前にあ

ることを意識していた。ギロチンのスイッチに指をかけた。射精とともにスイッチを押した。「ブーン」と風を切る音がして紗也香の生首が、コンクリートの床に転がった。鮮血が切断面から吹き出した。

紗也香の瞳が一瞬激しく痙攣した。男はいつそう強く、柔らかく大きな尻を抱きしめた。とろけるような余韻を楽しんでいた。

部屋の隅で、美香はもう一人の男に仰向けにされ瞳を舐められていた。大きく広げた腕に何か触った。掴んでみるとそれは紗也香の生首だった。

「ギャー」絶叫を発し、そのまま失神した。失神の際に失禁し、男の顔を濡らした。

男は嬉々とした顔で、噴水のように流れ出る小水を口

で受けた。排泄されたばかりの小水は臭みもなく、若い女のエキスが含まれ美味に感じられた。男は失神した美香の膣に男根を挿入し、首を絞めながら腰を激しく動かした。どうせ処理される女だった。精液を吐き出した後に、仮死状態の美香に対し、紗也香と同じ処置をして、首を切断した。

その間、紗也香の首無し死体はベルトコンベアーに載せられ、次の工程へと運ばれていった。自動機械により内臓を抜かれた後、マイナス三十度の冷凍倉庫に逆さ吊りにされ保管された。美香の方は手足をばらばらに切断され、細切れにスライスされ発砲スチロール製のトレイにパック詰められた。

紗也香達を運んできたトラックは、次に渋谷にあるC国軍の研究施設で停車し、一人の女を降ろして、また次の目的地に向かった。女の名前は佐藤礼子。年齢二十三歳。C国軍に侵略される前は、都内の小学校で教師をしていた。彼女も容貌肢体は他の女に劣らず美しかった。一見どこにも火の打ち所がない身体に見えたが右脇腹に直径一センチほどの大きな痣があった。

礼子は、研究室の一室に入れられ、医療用ベッドに仰向けに寝かされた。研究室には白衣を着た男女が二人いた。男は三十代後半、女はまだ二十代前半であり、男の助手をしているようだった。女は整った容貌肢体を持っていた。

「ようこそ。牝豚ちゃん。あんたの身体を使って美味し

い牝豚調理法を研究させてもらいますよ」

女が流暢な日本語で話しかけた。男は痩せ形でメガネをかけていた。男は両手をベッドについて、礼子を観察している女の背後に回った。女のズボンに手をかけ、一気に足首まで下げ降ろした。下着は付けていなかった。男は真っ白で豊かな尻に頬ずりし、舌でアヌスを舐めた。男もいつの間にか全裸になっていた。

「博士はね。とっても好き者なのよ。トイレの後でも平気なのよね……あーん。いい」

女は礼子の太股を広げ、顔を埋めた。包皮を剥かれたクリトリスを女の舌に舐られ、とろけるような快感がわき上がった。アヌスにも深く指を入れられ、重たげな乳房も手でこねくり回された。女による執拗とも言える愛

撫に礼子は一回目の絶頂を迎えようとしていた。

気が付くと礼子は女に抱きすくめられ、口の中を舌でかき回されていた。女は礼子の唾液を貪るように吸い出した。背後からは、男に抱きつかれ膣に深々と男根を挿入されていた。精神的には既に二人の野獣に貪りくわれていた。

礼子は身体を逆海老剃りにして二回目の絶頂を迎えた。小波のような快感が股間からわき上がり目が醒めた。

今度は女が礼子の股間に顔を入れ、膣やクリトリスを舌で舐っていた。舌が、ピンク色をしたアヌスに移り、中まで浸入した。そこが十分に湿り気を帯びた時、男が男根を根本まで一気に差し込んだ。鈍痛が直腸を一撃した。排泄感と快感が入り交じった複雑な感覚だった。目

の前に女の性器があった。礼子の舌は自然に嬖を押し分け、クリトリスに軽く歯をあてた。女の尻が「びくん」と動いた。アヌスを責められ、あつというまに三回目の絶頂を迎えた。その後も二人による愛撫は延々と続き、礼子自身何度いったか分からなくなっていた。いつの間にか失神していた。

今までに経験したことがないほどの激痛で目が覚めた。いつの間にかベッドにうつ伏せに寝かされ、手足をベッドに縛り付けられていた。女が礼子の尻の肉をひとかけらメスで切り取った。激痛と恐怖から礼子は泣き叫んだ。血が腰を伝わり、ベッドに流れ落ちていた。女は切り取った肉辺の一部を液体の入った試験管に入れた。

細切れにした尻肉を博士と自分の口に入れた。

「あんたのお肉はとろけるような柔肉よ」

今度は腿肉を同じように切り取られ、試験管に一部を入られ他は生のまま、二人に食された。女は礼子の太股と腰を掴み、腿尻に刻まれた長さ十センチの切り口にむしゃぶりついた。生肉を歯で噛み千切り飲み込んだ。

尻を振り、男を刺激した。男に背後から貫かれながら、女は礼子の柔肉を貪り続けた。礼子は白目を剥いて失神した。女は顔を上げ、首を後ろに曲げ、背後の男の唇に吸い付いた。男に礼子の尻肉を、口移しで与えた。

行為の後二人は、礼子を仰向けにさせ、乳房と性器を切除した。女は笑いながら、激痛で再び目が覚め泣き叫ぶ。礼子の腹をメスで深く縦に裂いた。肝臓を取り出し、

生のままかぶりついた。鼓動を続ける心臓にゆっくりとメスを刺していった。

「牝豚の肉は生が一番ね」

真由美は横浜にあるC国軍駐屯地でトラックから降ろされた。二十歳になったばかりの真由美は、以前はごく普通のOLだった。社内きつての美貌の持ち主ではあったが。すぐに素っ裸のまま兵隊用宿舎に放り込まれた。中には女に飢えた兵隊達が三十人ほど待ち構えていた。我先にと泣き叫ぶ真由美の裸体に群がった。

無数の手が、指が、舌が、真由美の全身を這い回った。

太股を限界まで開かれ、膣やアヌスを舌で舐られた。

乳房には容赦無く歯が立てられた。気がつくくと、膣、

アヌス、口とあらゆる穴が男根で塞がれていた。喉の奥まで衝かれる苦しさのあまり、涙が溢れ出た。直腸を衝かれるたびに排泄感が湧き上がった。

突然、髪を鷲掴みにされ喉の奥に精液を注ぎ込まれた。休む間もなく次の男根を啜えさせられた。真由美は途中で意識を失っていた。男の肩に載せられた両足の白さが際だっていた。飢えた男達は、人形のような真由美の白い身体を貪り続けた。数時間に渡って陵辱は続けられた。

陵辱の後、男達が真由美を食堂に運んだ。でっぶりと太った赤ら顔の料理長に真由美を引き渡した。

厨房には直径一メートル、深さ一メートルの大鍋が置かれ、火に掛けられていた。料理長は真由美を床に四つん這いにし、背後からきれいなピンク色をしたアヌスを

舌で舐った。

「今日は牝豚一匹をそのまま茹で上げ、スープの具にしてやる。しかし何と旨そうな柔肉だろうか」

独り言をいい、アヌスの愛撫を継続した。十分に湿り気を持たせ、大人の腕の太さ位の浣腸器を取り出し、一気に入挿した。腸内を洗浄した後に、両手両足を縛り、生きたまま大鍋に投じた。温度はまだ四十度ほどで、むしろ適温と言えた。真由美は何とか顔を出し、呼吸を続けた。大量の玉葱や人参等の野菜が入れられ、真由美は自身の運命を悟った。茹でられ豚のように食されることを。料理長が塩・胡椒の他に様々な調味料を入れ、スープの味見をおこなった。

「牝豚の出汁が出てさすがに旨い」

この時は五十度くらいになっており、真由美は熱さのために気が遠くなりかけていた。そのうち、真由美の身体は煮え立つスープの中に没していった。

宿舎の夕食には、茹で上げられた真由美が丸ごと大皿に乗せられ、テーブルの中央に出された。湯気があがっている真由美の肉は十分に柔らかく、箸でさばくことができるほど、よく茹でられていた。性器や尻肉があつというまに切り取られていった。兵士達は真由美の出汁が効いたスープを喉に流し込み、柔肉に舌鼓を打った。

そこは、東京都内に位置する国立病院のロビーだった。ソファー類はすべて取り除かれ、何も置かれていなかった。そこに大勢の首に皮ひもを巻かれた全裸の若い女達が、呆然と立ち竦んでいた。皮ひもにはよくみると赤い

色の数字が描かれていた。どの女も皆、驚くほど美しい容姿をしていた。女達の傍らには衣服を入れた赤い籠が置かれていた。

「さあ。準備……ができた者から、ここに二列に……並ぶんだ」

医務室へと続く廊下の入り口に立った大柄な女兵士が、たどたどしい日本語で叫んだ。女達がのろろとした態度で、並びはじめた。

「早くおし！」

特に動きが緩慢な女を捕まえて、乳房に棒状のものを押し付けた。

「バチッ」という小さな音がして、女は仰向けに倒れた。股間から尿が漏れ出た。それは三十万ボルトを発

生させることができるスタンガンだった。女達の動きが急に早くなったように感じられた。

しばらくした後、ロビーには失神した女と女兵士の二人だけとなった。女兵士は、懐からC国語で書かれた伝票を取り出した。そして特A級牝豚数と書かれた数字を、ボールペンで一人減らした数に書き直した。それから、辺りを窺い、誰もいないのを確認した後、失神し床にうつ伏せに倒れた女を担ぎ上げ、女達が向かった方向と反対側にある廊下を歩きはじめた。

廊下の突当たりの部屋に入り施錠した。部屋は二十帖ほどの広さで、中央にテーブルがあり、窓際にはシンクが設けられていた。女兵士は、テーブルに失神した女を仰向けに寝かせ、頬に平手打ちを食わせた。女が、失神

から醒めぼんやりと辺りを見廻した。女兵士は戦闘用ナイフを女の首筋に当てた。

「悲鳴をあげたら殺すよ。あたいはメイだ。あんたも自

己紹介しなよ」

「……美由紀です。北村美由紀といいます」

「ここに来る前は、何していたんだい？」

「大学に通ってました」

「へー。いいご身分だね。歳は幾つになる」

「二十一です」

「彼氏はいるのかい？」

「……」

「まあいいか」

メイは美由紀を後ろ手に縛り上げ、猿轡をかませた。

両手でむっちりとした太股を押し開いた。美由紀は、もがきながら自由な両足を使ってメイから必死に逃れようとしたが、強力な筋力の前に屈服した。剥き出しにされた性器に武者振り付いた。女兵士の整った顔立ちが欲情のためか醜く歪んでいた。猿轡の隙間から、低い啜り泣きが漏れた。女兵士は、男でも女でも抱くことができるバイセクシャルであった。このように若く美しい女を抱くのは、初めてのことだった。膺から滲み出す蜜液は素晴らしい味がした。太股をさらに持ち上げ豊かな双球の間に息つくサーモンピンクのアヌスを舌で舐った。

しばらく、アヌスの味を堪能した後、軍服と下着を脱ぎ捨てた。メイの身体は鍛えられた筋肉で覆われていた。

豊かな乳房と、盛り上がった尻を持っていた。メイは、

背囊から、二本の男根を繋げた張り方を取り出し、一方を自分の膣に挿入した。そして美由紀の太股を広げ、覆い被さっていった。美由紀の美しい顔が歪み、猿轡の間から低い喘ぎ声が漏れた。それに答えるようにメイが激しく腰を使いはじめた。

メイが絶頂に達したのは、美由紀が三度目のアクメを迎えた時だった。ぐったりとした美由紀から放れた。

満面の笑みを浮かべながら、下着と軍服を身に着けた。天井にフックの留め金を打ちつけ、フックのついたロープを垂らした。そのロープで美由紀の足首を縛り、天井に逆さ吊りにした。そして戦闘用ナイフを鞘から抜き、美由紀の顔にかざした。



「お前のオマ\*コは最高……だったよ。次は……お前の  
柔肉を……食らってやる」

ただたどしい日本語で話しかけた。

「オマ\*コから食ってやろうか？」

戦闘用ナイフの峰の部分で、美由紀の股間をなぞった。  
美由紀の身体がビクンと跳ねた。

「それともケツからいたただこうか？」

美由紀の身体を裏返しにし、豊かな尻の割れ目に右手を差し込み、人差し指を出し入れした。猿轡の隙間から喘ぎ声 leaked。メイはにやついた顔をして、乳首を摘みみおもむろにナイフで切断した。鮮血が吹き出し、メイの胸を赤く染めた。美由紀は白目を剥いて失神した。切断した乳首を口に放り込み咀嚼し飲み込んだ。

「配給が不十分だね。飢えてんだよ」

メイは独り言を呟いた。笑いながら美由紀の喉元に戦闘用ナイフを深々と差込んだ。その時、美由紀の切れ長の大きな瞳が見開かれた。女兵士はナイフを握る手に力

を込めた。首が半分ほど切断され、鮮血がシャワーのように吹き出した。

「血抜きだよ」

鮮血に下半身を濡らしながら、美由紀の髪を鷲掴みにし、戦闘用ナイフで一気に首を切取った。切断面から鮮血が滝のように流れ落ちた。椅子に腰掛け、美由紀の生首の口を開け、舌を引きずり出した。それをナイフで切断し背囊から取り出したビニール袋に入れた。傍らの首無し死体を見ながら、タバコに火をつけた。天井から吊るされた様子は豚や牛と変わらなかった。ただ、死んでもまだ、艶がありすべすべした尻の膨らみや乳房が艶めかしく思えた。

「これで、一週間は持つね」

三十分後、メイは、立ち上り女の乳房を鷲づかみにして根元から切断した。両方の乳房を先ほどのビニール袋に入れた。そして、下腹部にナイフを差込み、下に向かって切り下げた。色とりどりの内臓が、現われ腹腔内の圧力と自重のために肌を伝わって下に落下しはじめた。肝臓と心臓のみを、取り出しビニール袋に詰めた。次にロープを切断し、首と内臓を失い軽くなった死体を、うつ伏せの姿勢でテーブルに寝かせた。白く盛り上がった片尻を掴み、腰の付け根にナイフを差込、太股に向かって肉塊を切り取った。もう一方も同じように切断した。

切り口からきれいな赤身の肉が見えた。メイは、太股と腰の肉を鷲づかみにし、尻の切り口に噛み付いた。ゴロゴロと喉を鳴らし、柔肉を頬張った。まるで虎が獲物

の鹿に食らいついているかのようにだった。柔肉を噛むとジューシな肉汁が口内いっぱいに広がり、空腹感が充たされていった。柔肉を貪りながら、オナニーを始めた。逞しい尻を振りながら果てた。次に太股の肉を切り取り、拳大の肉塊を残しビニール袋に入れた。さらに切り取った腿肉を、生のまま歯で噛みちぎり咀嚼し、飲み込んだ。癖のない上品な味がした。あつと言う間に胃袋に収めた。

最後は、性器部分を深々と抉り取った。膣口の切り口から子宮を掴みだした。それらを背囊にしまい込み、背負った。ずっしりと肩に重みを感じた。筋肉や手足も貴重な蛋白源となるのだが、背囊はもういっぱいだった。名残惜しげにナイフで一塊の筋肉を切り取りポケットに押し込んだ。

また、一塊を切り取りむしゃぶりついた。この女は栄養がいきとどいていたとみえて非常に美味だった。

その場を去ろうとした時、排尿がしなくなり辺りを見回した。床に美由紀の生首が転がっているのを見つけて微笑んだ。生首を拾い、口を開け、上向きに床に置いた。ズボンを降ろしその上に跨り、小水を口に向け垂れ流した。すぐに口から小水が溢れた。その様子を見てメイは急に高ぶり、美由紀の顔を持ち上げ股間になすりつけた。

「おお……。いい」

生首をもみくちやにしながら絶頂を向かえた。床に座り、肩で「はあはあ」と息をして暫くの間休んでいた。五分ほどして立ち上がりそのまま、廊下に消えた。テーブルには無残に切り裂かれた首無し死体が残された。

午前八時過ぎ横浜の郊外にある短大の女子寮に、C国軍の軍用トラックが向かっていた。総勢三百名の兵士達が二十台の軍用トラックに分乗していた。彼らは各部隊から抽選で選ばれた者達だった。皆、ドス黒い笑みを浮かべていた。女子寮の周りには、深い森になっていて民家は無く、大きな物音を立てても苦情を言う住民はいなかった。

総二階建てで瀟洒な造りの洋館の前にトラックは止められた。トラックの幌が開けられ、欲望のためにぎらついた顔をした兵士達が次々と飛び出し、一斉に入り口に殺到した。オーク材の重い扉が、蹴破られ彼らは我先にと屋内になだれ込んだ。若い女の恐怖に満ちた悲鳴が湧き上がった。寮内には百名の二十歳前後の女達が、各

部屋で息を潜めていた。兵士達は各部屋に乱入し、隠れていた女達を捕らえ丸裸にした。

兵隊達は、極限まで女の身体に飢えていた。日本占領後、軍上層部は日本国民への暴力行為を厳しく取り締まった。違反するものは、即刻、公開処刑された。軍上層部は兵士達の欲求を制限することが、志気に影響することも心得ていた。公には無く密かに兵士達に女を与えた。

素っ裸にした女の太股を広げがつつと音をたてて貪った。四つん這いにして後ろから尻の割れ目にそって舌を這わせた。背後から白い女体をかき抱き、豊かに盛り上がった乳房を揉みしだきながら腰を激しく突き動かした。

三百人の兵士達が百人の女達に挑み掛かっていた。女はひとりりで複数の兵士達に責められ、口や膺やアヌスと全ての穴にペニスを挿入された。若い兵士達は各々が数名の女を這わせた。女達はひとりで何人もの兵士の相手をさせられた。少しでも抵抗をした女は激しく叩かれ、髪を掴まれ引きずり回された。上官からは殺してもかわわないと言われていた。殺しを前提とした暴行は、残虐を極めていた。ある女は、ペニスで激しく喉をつかれ、苦しきのあまり失禁した。後ろからアヌスをつかれ、髪を振り乱して泣き叫ぶ女もいた。意識を失った女の膺やアヌスに拳骨を出し入れしている兵士もいた。兵士達にとって、女達はもはや人間では無く、極上の柔肉を持つた家畜に等しかった。陵辱は朝から正午過ぎまで続けら

れた。

兵士達が、女達を陵辱している間、芝生が敷き詰められた四百平方メートルほどの広さの裏庭では、昼食の準備が進められていた。容貌肢体が整った十人の女達が、全裸で後ろ手に縛られ、芝生の上に敷かれたシート上に転がされていた。彼女達から五メートルほど離れたところに幅五十センチ長さ一メートルほどのコンロが十台置かれ、真っ赤に燃える炭がくべられていた。

また、ひとつの大鍋が焚き火の上にかけられていた。中には水が満たされていた。召集の合図の笛が吹かれた。裏庭に素っ裸の女を抱えた兵士達が集まり始めた。女達は、激しい陵辱のためか皆、ぐったりとしていた。兵士達は、芝生の上に直に座り、女をかき抱き尻を摩り、



乳房をこねくり回し楽しんでいた。兵士達全員に老酒が振る舞われた。

裏庭の中心に置かれたテーブル席で、ひとりの将校が立ち上がった。

「昼食の時間だ。メニューは牝豚の串焼きと網焼きだ。

皆、肉は久しぶりだろう。存分に味わえ」

シートの上に寝かされている女達に兵士達が殺到した。そのうちの泣き叫ぶ五人を四つん這いの姿勢にし、二・五メートルほどの鉄串を、アヌスから一気に差し込んだ。手串の先端が、肩先や口から飛び出した。女達は激痛のために白目を剥いて失神した。ショックで死亡した女もいた。

兵士達は、口笛を吹きながら串刺しにした女をコンロの両端に立てられた支柱に固定した。すぐに肉を焼く香

ばしい匂いが広がり始めた。失神から醒めた女達は生き  
たまま焼かれる苦痛に身もだえ、絶叫を上げた。その傍  
らに置かれた五台のテーブルには、それぞれ五人の女が  
四つん這いにされていた。両手両足を兵士達に掴まれ動  
くことはできなかった。反り身の日本刀が女達の首に上  
げられた。日本刀を持った兵士は笑いを浮かべながら頭  
上に振りかざした。ブーンという風を切る音がして、女  
達の生首が次々と宙に舞い、切断面から鮮血が迸り出た。  
周りで見ていた兵士達は、中華包丁や刺身包丁を手に  
し、女達の首無し死体に殺到した。解体はあつと言う間  
だった。豊かな乳房がテーブル上を転がり、ブロック大  
に切り取られた尻肉が金属製のボウルに入れられていく。  
四肢を切断し、腹を割き内臓を掴みだした。女達の肉

塊は、コンロの上に敷かれた鉄網に載せられ、塩・胡椒を振られた。肉を削り取られた肋骨や大腿骨は、野菜と一緒に大鍋に入れられた。兵士達のひとりが塩、胡椒等の調味料で味を調べていく。焼き上がった肉はすぐに配られ、兵士達の口に消えた。兵士達にとっては最高のご馳走だった。肉自体口にするのは数年ぶりのことだった。

老酒を飲み、女の腿肉を喰い、膝上に抱いた女を犯した。兵士達の食欲は止まるところを知らなかった。こんがりとキツネ色に焼けた女達の串焼きは、テーブル上で解体され兵士達に配られた。それらもあつと言う間に三百人の兵士達の胃袋に収まった。

広場の中央では特設ステージが設けられ、美しい容姿をを持った四人の女達による死のゲームが始まっている

た。四人は全裸で絡み合いお互いを食り合っていた。ゲームのルールは誰を先にいかせるかというものだった。最初に絶頂に達した女は、すぐさま調理され食り喰われる運命にあった。

一人の長身の女が、残りの女達のターゲットになっていた。三人の女達は生け贄を選んでいった。生け贄は四人の中で最も美しい容姿をしていた。豊かな乳房や尻に加えて擬脂のような肌をもっていた。

必死に抵抗する女を押さえつけ、それぞれが乳房、性器、アヌスを舌や指で舐めた。死の恐怖に怯え、泣き叫んでいた女も執拗な愛撫のために、力を抜き為すがままであった。

一人の女が勝ち誇ったように、生け贄の膣に指を入れ、

激しくこね回していた。生け贄は、指の動きに合わせ腰を前後に振り始めた。もう一人がアヌスにも指を深々と差し込み、大きくかき回した。

女の肩が上がり、鋭い喘ぎ声を上げ四肢を大きく突っ張った。すぐにくんと言う感じでステージに横たわった。

ぐったりとした生け贄の女は、すぐに兵士達によって、アヌスから鉄串を刺され、とろ火で炙られた。一方勝者である三人の女達も、ステージの上で、有無を言わず日本刀で差し貫かれた。虫の息の女達は、刺身包丁で活き作りにされた。尻を裂かれた者、太股に包丁を入れられた者、腹を割かれた者が、横たわった。兵士達はステージに上がり、女達の生肉を皿にとった。

「キヤー！」

兵士に抱かれていた一人の女が、立ち上がり逃げようとした。女を抱いていた男が日本刀を引き寄せたからだ。

兵士は逃げようとした女の首を一閃ではね飛ばした。

鮮血を噴いて倒れ伏した首無し死体は、テーブルに運ばれすぐさま解体された。そのようにして、総勢十五名

の女達が、家畜のごとく貪り喰われた。残った女達も、

生きたまま箱詰めになれ、各部隊の手土産として運ばれていった。女達の運命は、激しい陵辱の後に、解体調理

され貪り喰われる過酷なものであった。

完

第二章 悪魔の試食会

第三章 人肉市場

第四章 楊大佐

第五章 洋上の悪魔

第六章 永遠の悪夢